

川原ゆかり教授追悼論文

現代ミクロネシア社会における青年期の苦悩—ジェンダー観をめぐる伝統と近代化の関係についての一考察—

An Essay in Memory of the Late Professor Kawahara Yukari

The Anguish of Youth in Contemporary Micronesian Society: Gender and the Relationship Between Tradition and Modernization

Keywords: KAWAHARA Yukari 川原ゆかり、cultural anthropology 文化人類学、gender ジェンダー、masculinity 男性性、Micronesia ミクロネシア、Republic of the Marshall Islands マーシャル諸島共和国

1. はじめに

2013 年、早稲田大学文学学術院教授の川原ゆかり先生が亡くなられた。ここ数年体調を崩されていたことは耳にはしていたが、その突然の知らせに多くの研究仲間や学生たちは自分の耳を疑うばかりであった。そして、先生のあまりにも早すぎる旅立ちに対してただただ残念という気持ちでしか表現することができないというのが、多くの友人たちが抱いた正直な気持ちであろう。

川原先生は、慶應義塾大学を卒業後渡米し、『ジェンダー・トラブル』（1990[1999]）の著者であるジュディス・バトラーの指導の下、ジェンダー研究を中心に学問を行われ、日本の中学校でのフィールドワークを下に、日本の思春期のジェンダーについて考察された論文を発表し、米国イエール大学において博士号を取得された。その後日本に戻られて、2001 年より早稲田大学文学部に所属され、以後 13 年間にわたり、文化人類学およびジェンダーの授業を

担当され、多くの学生たちの研究指導をされてこられた。また、早稲田大学に
来られてからは、文化概念の再構築や、日本や米国における家族のあり方の変
容に関心をお持ちになり、いくつかの研究論文を発表された（川原 2006、
2007）。

筆者は、先生が早稲田大学准教授に就任されて以来 12 年間、筆者の大学院
での研究活動における指導教員として、文化人類学を中心に指導を受けてきた。
筆者の研究分野は、日本の民俗芸能やミクロネシア地域の政治・経済学が中心
であったが、各方面への論文投稿などの折に先生よりジェンダーの視点を中心
に有意義なコメントをもらうことができた。2003 年以降は、フィールド調査で
日本を離れることが多かったため、直接の指導を受ける機会は限られていた。
しかし、先生の日本研究ならびにジェンダー研究に対する知見は、その後も国
内外の数多くの後輩たちに受け継がれていることは認識している。

川原先生の指導の中で筆者が特に印象を受けているのは、日本及び米国にお
ける「男性性（男性らしさ）」をめぐる歴史的変遷に関する視点である。とり
わけ 2000 年代半ばには、ミシェル・フーコーやバトラー、あるいは米国を中
心とした「masculinity studies」の動向を利用しながら、特に日本における「男
性性」というものがいかに歴史の中で構築されてきたものであるかを明らかに
することに関心を向けていらしかった（Adams and Savran 2002; Gardiner
2002; Connell 2005）。先生が日本の芸能やポピュラー・カルチャーの事例を用
いながら、学生たちを指導する姿は今でも目に焼き付いている。

こうした歴史的に構築された「男性性」が現代社会に与える影響を分析する
ことで、筆者が長年フィールドワークを続けてきたミクロネシアのマーシャル
諸島においても常に興味深い事例となって筆者の関心を掻き立ててくれた。同
諸島は第一次世界大戦から第二次世界大戦までの 30 年間を国際連盟委任統治
領として日本の施政下に、第二次世界大戦後は国際連合信託統治領として米国
の施政下に置かれ、それぞれの文化の流入を受けながら社会変化を受けてきた。
その結果、今日の若者たちのジェンダー観、とりわけ『男性像』をめぐる、

伝統的な社会秩序と外国から流入してきた価値観のはざままで苦しんでいる様子を確認することができる。

本稿では、マーシャル諸島における若者の揺れるジェンダー観について、その背景にある歴史的な影響を中心に記述していく。具体的には、はじめにマーシャル諸島における伝統的価値観に基づいた親族社会やジェンダー観について民族誌事例を中心に提示する。つぎにこうした伝統的価値観が日本や米国の施政下で変化が加えられた歴史の変遷について述べていく。さらに、歴史の変遷の中で揺れるジェンダー観、「男性観」の中で苦しむマーシャル諸島の青年の事例を挙げながら、「男性とはどうあるべきか」を周囲から持ちだされて、自分のアイデンティティの構築に苦しむ現代社会の若者たちの苦しみについて考察していく。

2. マーシャル諸島社会における社会の特徴

マーシャル諸島共和国は、北緯 4 度から 14 度、東経 160 度から 173 度の間に広がっており、29 の環礁と 5 つの島から構成された島嶼国である。同国は、1986 年 10 月に米国との間に自由連合協定を締結し、それに伴い独立を果たした。独立以前、これまで同国を含むミクロネシア 3 国（ミクロネシア連邦・パラオ共和国・マーシャル諸島共和国）は、スペイン・ドイツ・日本・米国の統治下に置かれてきた。とりわけ、ハワイに近い地理的な環境もあり、マーシャル諸島は 3 つの国の中でも第二次世界大戦後もっとも米国の影響を受けた国と言われている。

マーシャル諸島は南北に二つの列島が連なっており、それぞれマジュロ環礁を中心に東側に連なる列島をラタック（Ratak）列島、クワジェリン環礁やジャルト環礁がある西側をラリック（Ralik）列島と呼んでいる¹。人々がマー

¹ マーシャル語でラタックが「日の出」、ラリックは「日の入」を意味しており、この括りで言語的・民俗的な相違を語られることが多い。ただし、ラリック列島の最西部のエヌエタック島に関しては、日本統治時代は他のマーシャル諸島がヤルト支庁として位置づけられていたのに対し、距離的關係からポナペ支庁に置かれていた。

シャル諸島に住み始めたのは、今から 2000 年前ごろと考えられている²。マーシャル諸島の島々いずれも、山も川もなく、そのほとんどは「環礁」と呼ばれる、ドーナツ状の形をした平均海拔 2~3 メートルという低い島であった。人々は、この環礁というその特殊な環境に適応すべく、独特の生活様式や社会構造を構築していった。中でもその重要な要因となったのは、親族組織・身分制度・土地所有制度・婚姻制度などの諸制度の相互依存関係である。マーシャル諸島社会における親族組織を見た場合、他のミクロネシア地域と同様、母系社会で構成されており³、土地および財産の所有権は、ブイジ (bwij) とよばれるリネージを通じて相続される⁴。国内の土地は、ウェト (weto) と呼ばれる島をラグーン側から外洋側に横切る縞状の土地区画に分割されており、それぞれウェトは個人の所有物として存在するのではなく、あるブイジに所属する女性より生まれたすべての人々により共同で所有されている (LaBriola 2006)。

一方、マーシャル諸島の社会全体を身分制度に基づき見た場合、イロージ (Iroij) と呼ばれる少数の貴族層とカチョール (Kajur) と呼ばれる大多数の平民層で構成されている。またカチョールもアラップ (Alap) とリジヤルバル (Rijerbal) により構成されている。

イロージ (女性の場合はレロージ) は土地の所有に関する統制、その土地か

² 言語学の研究成果によると、今から 3000 年以上前に、東部ミクロネシアの島々で人々の居住が行われ、それから西方の島々に向かって拡散していったと言われている。一方、考古学的には、マーシャル諸島に人間が居住し始めた頃には、今から 2000 年前頃までしか遡れず、チュークやポンペイなどとは同時期に居住が行われたと考えられている (Dye 1987; Riley 1987)。

³ マーシャル諸島を含むミクロネシア地域では、ヤップ諸島のような例外はあるものの、概ね母系制社会が形成されており、戦後米国の人類学者が中心にその分布状況及びその変容について調査が実施されてきた (DeBrum & Rutz 1967)。

⁴ 各環礁には、祖先を共有すると外婚単位で、ブイジを束ねる形で構成されるチョーウィ (jowi) と呼ばれるクランが存在していたとされ、環礁間の抗争の際に機能したと伝えられている (Walsh 1999)。ただし現在では、ブイジと比較して使用されることはほとんどなく、高齢者が同じ環礁出身という程度の意味として使用されるにとどまっている (Pollock 1976)。

ら獲得できる資源の使用権と分配権、および土地をめぐる紛争に関する裁判権を有している(Tobin 1952)。イロージのタイトルは母親から娘の系譜で継承される。中でも、イロージ族の本家筋にあたる一族では、その家長にあたる人物に男が就任し、イロージラプラプ（大首長、Iroijlaplap）が誕生した場合は、一族はもちろん、その臣民であるアラップやリジャルバルも含めて、島をあげての祝賀が行われる。イロージラプラプは全ての人々を平等に扱うことが求められるため、自らの周りには複数の女性と同時に、子供の頃から女性として育てられた男性、あるいは現代社会においては「性同一性障害」とされる自己アイデンティティにおいては女性である「男性」が好まれて、イロージラプラプに仕えるケースが多かった。

一方、アラップは土地の管理権と、日常行為における業務管理権を有している。リジャルバルは、その土地の日常業務を遂行する権利を有しており、建築、漁業、植物の収集などを行うことになっている。また身分の称号に関しては母系制相続、すなわち母親の系譜を通じて継承されていく。ゆえに、全てのマーシャル諸島の人々は、いずれかのウェトに土地の権利を有している⁵。今日において、土地の使用・賃借などを決める場合には各層の代表の許可が必要となっている (Pollock 1974)。

このように、マーシャル諸島は、少数のイロージと呼ばれる伝統的首長層と、カチョールと呼ばれる平民層から社会が成り立っており、その平民層もアラップという土地所有者の下で、リジャルバルと呼ばれる労働者が椰子の実の収穫やタロイモ耕作に従事している。こうした親族組織・身分制度は現代社会においても引き継がれており、政治家の発言や冠婚葬祭はもちろんのこと、日常の井戸端会議などの場面においても出自に関する情報が重視されている。

⁵ 具体的には、マジュロ環礁内に土地所有権を持っている人は、マジュロ人 (RiMajol) と名乗り、ビキニ環礁に土地所有権を持っている人々はビキニ人 (RiBikini) と名乗るのである。ただし、離島間の交流が活発化した今日においては、複数の環礁に異なる称号で土地所有権を有する人々も存在する。

またタイトルや土地所有の系譜が母系出自に基づき継承されるということから、しばしばマーシャル諸島の社会では女性の社会的権威が強いと考えられがちである。しかし、実際には、そのタイトルや所有権を保持しているのが女性の場合は、その女性の兄弟や息子が実権を握っているケースがほとんどである。そのため、男の子が誕生した場合は、一族を上げて喜び、その子は一族の女性によって大切に育てられる⁶。

一方で、この親族組織を支えていくために機能してきたのが、婚姻関係をめぐる慣習である。マーシャル諸島では、とりわけイロージなどの伝統的首長の一族やアラップなど土地所有権を継承することを求められる一族においては、それぞれ同じ階級同士での交叉イトコ婚が奨励されることが多かった。今日では結婚相手を決めるのにこうした家柄を尊重することは少なくなっているとはいえ、自分の子供が結婚適齢期を迎えると親族同士で、適齢期同士のカップリングが行われていく。とりわけ、このカップリングを促す役割を果たすのが一族の家長であるイロージラプラブやアラップの家族である。彼らは同世代の若者たちを結びつけるために、子供同士の家族を一族の行事で積極的に交わらせる機会を与えたり、あるいは同じ学校に通わせるように仕向けるなど、自然と当事者同士を結び付けるようにアレンジをしていく。

それでは、当事者はそのような状況に置かれていることをどのように考えているのであろう。当事者の多くは、親族組織は最重要なものであると認識し、家長の命令の下で生活していくことが当たり前と考えている。そのため親族により設定された婚姻関係についても特段に不平不満を持つ様子は見られない。また、かつては婚姻関係とは別に、ほかのパートナーと関係を持つことに対するタブー視はされてこなかったことが民族誌においても指摘されている。その場合、もし生まれた子供の生物学上の父親が婚姻相手と異なっていた場合でも、

⁶ 家長になる男の子は、一人前になるまで母親はもちろん、叔母や姉妹たちによって、日常の着替えから食事に至るまであらゆる世話をしてもらうなど大切に扱われるため、しばしば周囲からは、マーシャル諸島で家長に生まれると、身の回りのことは何もできなくなると揶揄されている。

その子供を相手が自分の子供として認めれば、社会的に問題視されることはなかった⁷。

むしろ問題視されるのは、婚姻関係が当事者の都合で御破算になる行為であった。すなわち、婚姻は一族同士を結び付ける紐帯としての役割を果たしていると考えられるため、当事者同士の意思で破棄することは、それぞれを結びつけるために働いている家長たちの顔に泥を塗る行為に等しかった。とりわけ、女性側や平民側から、男性やイロージ家などの上級の一族の申し出を断った場合は、前者側に対して社会的制裁があった。それと同時に、断られた男性当事者に対しても、親族のプライドを傷つけられる行為を被ったとして一族から追い出されるなどの厳しい社会的制裁が加えられる事例が確認されている。

3. 欧米諸国とのコンタクトに伴う社会制度の変容

このように、マーシャル諸島の社会では一族を中心とした親族組織に基づき、婚姻関係や土地などの権利関係が厳格に構築され、母系系譜の下で代々継承されてきた。とりわけ、一族の結束やメンツを守ることが最重要視されており、その意味では個人の意思は重視されてこなかったとも言える。

しかしながら、15 世紀以降マーシャル社会も欧米諸国との接触により、社会制度に変化が生じてきたことが確認されている。大航海時代以降、スペイン・ドイツ・日本・米国の各統治下に置かれたが、とりわけ伝統的な価値観などの社会の変革が大きくもたらされたには、第二次世界大戦後の米国の影響である (Boyer 1967)⁸。

⁷ 歴代のイロージラブラブやアラップの中には、父親がイロージではなく、外国人であると指摘されているものの、その父親であるイロージが自分の子供であると認めることで、後継ぎとされた事例も確認されている。

⁸ 19 世紀以降のドイツや日本の統治がマーシャル諸島社会の変容に与えた影響も決して少なくはない。ドイツの場合は、植民地政府による統治の中で、それまでイロージの下に収穫物が収集・分配されるというシステムに代えて、イロージ・アラップ・リジャルバルに一定の割合ずつ分配されるシステムへと変更され、アラップやリジャルバルにとって、土地に対する権利が芽生える契機となった。また、第一次世界大戦後マーシャル諸島が日本の委任統治領の支配下に組み込まれると、平民階級、とりわけアラップのリーダーシップが強調されるようになる。各環礁単位で支配組織を構築することを考えた日本政府による統治システムによって、一部の環礁ではその環礁リーダーである「村長」に地域で比較的有力なアラップが任命されることになった結果、アラップ層やその子弟である一族が地域のリーダーとして台頭していった (黒崎 2013)。

第二次世界大戦後、米国は日本の旧南洋群島の一部であるマーシャル諸島を国連信託統治領として統治するにあたり、多くの文化人類学者を現地の調査団や行政官として導入し、現地社会の調査を行うなど、当該地域の社会組織に合わせた形での統治を進めようと考えていた。しかしながら、実際には米ソ冷戦構造の中で、ミクロネシア地域を「米国の海」とするべく、他国民の無許可での居住や他国からの貿易や投資事業を認めず、こうした政策を通じて周囲との接触を遮断した。一方で、現地住民に対しては、生きていく上での最低限の物資の供給という形での支援にとどめ、インフラの整備はほとんど行わないなど、いわゆる「動物園政策」を敷いて、同地域の自立を事実上不可能にしようと考えていた。

しかしながら、1960年代にハーバード大学のアンソニー・ソロモン教授らによる現地調査の結果、マーシャル諸島を含むミクロネシア諸地域では、日本時代に教育を受けたエリート層が中心となり、米国からの自治独立を目指す動きがあることが確認された。これ以降、米国政府はミクロネシア地域に対する政策を転換し、親米化政策を進めることになる。とりわけ大きな影響を与えたのが、この地域への教育支援のため派遣された「平和部隊（Peace Corp、ピースコー）」と呼ばれたボランティアたちであった。

マーシャル諸島でも1963年に2人のボランティアが高校教師として派遣されて以降、その数は毎年拡大されていき、一時は2万人ほどの島国に100人を超えるボランティアがやってきて、離島を含めた各地で活動を展開していた。また、こうしたボランティアの中から一部の者たちは、現地に永住する道を選び、現地のエリート層の子女たちと結婚し、マーシャル政府の官僚に就任したり、建設業者などの企業を設立するなど政財界に進出し、その子供たちを含めマーシャル諸島の政治・経済の重鎮として活躍している⁹。

⁹ ピースコーのOBとしては、初代のピースコーであり、マーシャル諸島唯一の新聞社である「マーシャル・アイランド・ジャーナル」の社主のジョー・マーフィーや、元マーシャル諸島電話局のCEOでマーシャル諸島独立の父であるアマタ・カプア大統領の長女と結婚したアラン・ファウラーが有名である。

一方で、現地のマーシャル人社会はこうした「ピースコー」の活動について、必ずしも好評価を与えているわけではない。とりわけ、年長者からは「ピースコーがマーシャル諸島にもたらしたのは、アルコールと薬物だけだ」という非難の声が多かった。一部の年長者は、「ピースコー」はマーシャル諸島の子供たちに対して、「個性の重視」や「伝統（因習）にとらわれない生き方」を奨励し、それまで重視されてきた他人を思いやる心や、協力し合う気持ち、そして家族や親族を重んじることの重要性を否定していると指摘した。

こうした地元の社会からの非難の影響もあったためか、マーシャル諸島政府も、独立以降の 1990 年代には、米国からのピースコーの派遣を中止した。一方で、教育面の向上を図るため、ピースコーとは別に、米国の大学が設立した教育プログラムによるボランティアの派遣を受け入れている。これらのボランティアの多くは大学在学学生もしくは卒業直後の若者がほとんどで、マーシャル諸島に来て初めて教育指導を行う者ばかりであった。そのため、現地のマーシャル人からは、彼らは遊び半分で来ている「無責任な若者」たちというイメージを持たれ、一部のマーシャル人からは、「マーシャル諸島の教育水準が低い原因は、このボランティアを導入しているから」という非難さえ上がっている。

もちろん、ピースコーが派遣された時代を含めて、マーシャル諸島で活動してきたボランティアたちが、全て無責任な人間たちなわけではない。中には、長期間の活動での滞在を通じて、マーシャル諸島における社会問題に関心を抱き、活動を終えてからもマーシャル諸島を対象とした研究活動に従事したり、ハワイや米国本土に移住してきたマーシャル人たちを支援する活動に尽力する OB/OG たちも少なくない¹⁰。しかしながら、ボランティアの多くは社会経験

¹⁰ 代表的な人物として、ジュリアン・ウォレッシュがあげられる。彼女は 1990 年代初頭にマジュロの名門私立学校であるアサンプション高校で 2 年間の英語教員ボランティアを行った。任務終了後は、マーシャル諸島の現代社会制度について考察した論文を発表し、ハワイ大学で博士号を取得している

(Walsh 2003)。その後は、ハワイに移住してきたマーシャル人の子供たちの教育を支援する NGO を設立し、マーシャル人たちの米国での自立支援活動を行っている。

が少なく、教員としての経験も持っていない。また、近年のボランティアに特に見られる特徴として、子供たちの教育に際して英語でしかコミュニケーションを取ろうとせず、マーシャル諸島の現地社会についての伝統や習慣などの知識を知ろうとする意識が低いという点である。そのため、教育の場でも、自らの持つ価値観や考え方を「グローバル・スタンダード」として押し付け、現地の人々の価値観は「非民主的で前近代的な因習」としてみなす傾向がある。

こうした結果、マーシャル諸島の子供たちは、家庭では親族組織を中心とした伝統的な価値観に基づく教育を受け、学校では米国ボランティアを中心とした「グローバル・スタンダード」と称される価値観に基づく教育を受けるという二つの教育のはざまに置かれているのである。

4. マジュロの思春期における社会的苦悩～青年たちをめぐる二つの事例から～

以上のように、日本や米国の施政下で、従来は緩やかな関係であった日常行為とジェンダーとの関係が、教育などを通じて厳格な一対一対応として構築されていき、若者たちに対して米国からもたらされた「グローバル・スタンダード」や「民主化」という名の下に強制されてきている。他方で、離島地域や伝統的な親族社会においては既存の価値観が残っており、その価値観も必ずしも表に出てこなくとも、親族集団の中で共有されている。こうした二つの価値観が共存する中で、その価値観が相反する事態に巻き込まれた時、人々は混乱を生ずる。とりわけ社会経験も少なく、自分のアイデンティティを形成する過程にある青年期の子供たちは、その相反する価値観の混乱に巻き込まれて、自ら命を落とす状況すら起きるのである。本章では、こうした混乱の中に置かれた2人の青年をめぐる事例を紹介し、その二人が巻き込まれた「悲劇」の背景にあったと思われる、相反する価値観の対立構造について叙述していく。

- (1) キリ島出身Jの事例—父親と周囲のジェンダー認識の相違に苦しむ小学生
マーシャル諸島南部にあるキリ島という島がある。この島は、人口1000人に

に満たない小さな島である。この島は長い間無人島であったが、第二次世界大戦後、米国核実験の実験場に故郷を提供したビキニ諸島出身者が強制移住された島となり、その子孫が中心に生活をしている。

この島に J という名の小学校 7 年生の「女の子」がいた。「彼女」は戸籍上の性別は男であるが、周囲の人々も含め、多くの親族や友人たちは「あいつの心は女だ」と認識している。

本人も自分は女性であると認識している。周りの同学年の子供たちより頭一つ出たすらりとした長身であったが、長く伸ばした後ろ髪にパンダナスの葉でできたオレンジ色の花の髪飾りをするなど、外見も周囲の女性たちと同じように着飾っていた。また、小学校においても、体育の授業などでは通常男性はバスケットボールや野球を、女性はバレーボールをするように分かれるが、J は迷わずバレーボールのコートに向かう。周囲の小学生もあるいは教員たちも、何の不思議な様子も示さずに授業は進んでいく。

こうした「彼女」をめぐる周囲の理解を示している理由の一つに、マーシャル諸島における伝統的な慣例があげられる。筆者が現地の郷土史家にこの事例について話を聞いたところ、同諸島の一部では 3 人以上男の子が生まれた場合、その一番下、もしくは下から 2 番目の男の子を、女性として育てる事例があるとのことである。（こうした事例はポリネシア地域では広く知られている。）そのように育てられた子供は、思春期を過ぎるとイロージの家に奉公に行き、イロージたちの身の回りの世話をしたとのことである。現在はこうした習俗は無くなっているものの、特に離島地域では年長者を中心にこの習俗を認識している事例が多く、J に対する周囲の評価もその一環であった。

J をめぐるごく自然な社会による扱われ方の中で、唯一不快を示しているのは父親である。この父親はキリ島を含む地方政府の議員を長年にわたり務めており、市長がマジロなどに出向いている場合は市長代理を務めることも多い。彼はまたビキニ環礁のアラップの一人であり、伝統的な催事においても中心人物として尊重されている。

彼は J および J に対する周囲の寛容さを快く思っておらず、J が示す「女性的な態度や行為を非難していた。父親によると、J が示す女性的な態度は明らかにマーシャル諸島の離島地域に残る因習であり、自分のように常日頃からマジュロや海外の人々、とりわけ米国人と接する者としては、J のような子供を持つことは「田舎者」として恥ずかしい思いをしなくてはならない、そのため、小さいころからきちんと男として「しつけ」ないといけないのだ、と述べている。そのため、J の女性的な行為をしかる父親の声が毎晩響き、ある晩には、髪飾りを付けられないように J の長く伸ばした髪をハサミで切りつけ、外の小屋の中に閉じ込めていた。

筆者は父親に対して、米国は同性愛者の権利を認めるなど、比較的寛容な社会ではないかと尋ねたところ、その父親はきっぱりと否定した。自分は子供の頃にピースコーから教育をうけたが、彼らは男というものは体を鍛えて、家族を守らなくてはならないと教えてくれた。今でもマジュロにそのまま住んでいる元ピースコーたちと話をするが、彼らは以前とまったく気持ちは変わっておらず、むしろ現在の多様化された米国本土を嘆いていると話していたという。このように父親のジェンダー観は 1960～70 年代にマーシャル諸島に派遣されたピースコーの影響を強く受けているように思われる。

一方で、周囲の家族たち、特に母親や年長者の女性たちは父親の意見をどのように認識しているのだろう。母親に話を聞いたところ、父親の価値観や J に対する行動は行き過ぎであるという認識は持っている。ただし、マーシャル諸島の社会ではイロージやアラップである家長の意見は絶対であるため、逆らうことはできないという諦めにもつながるコメントであった。

このようにして、J は寛容な社会と「厳格」な父親の下で成長することになる。筆者は J と接したのは数週間であったが、彼が言っていたのは早く高校生になってマジュロや海外に行きたいとのことであった。彼の親族はカリフォルニアにあるマーシャル人コミュニティに住んでいる。J は、この父親の下を離れて、自由になりたいと話していた。

その後、J は小学校を卒業すると、一度は父親により厳格なカトリックの私立学校に入れられることになったが、父親に反発して学校の寮を抜け出し退学、母親たちの協力を得てカリフォルニアに住む親族の下に逃げていった。その後の詳細は定かではないが、あるロサンゼルスに住むマジュロ出身のマーシャル人によると、ロサンゼルスの郊外にオレンジの花の髪飾りをしている非常に評判の美容師がいるとのことである。

(2) マジュロの高校生 B の悲劇—恋愛をめぐる社会的価値観の犠牲となった若者

筆者がマジュロで調査を行っている時に、非常に興味深く思われた事例に、10 代後半の男性の自殺率が極めて高いということであった。その数値は他のミクロネシアや太平洋島嶼国の数字の 2 倍近くを示している。筆者は同国保健省次官と話す機会を得た時にその事態について尋ねたところ、同次官も「極めて憂慮すべき事態だ」と述べていた。

この青少年の自殺については、国としての詳細な分析結果は出ていない。現地の新聞による記事や市井の人々の噂話などによると、国内不景気のため夢を見出せなくなった若者の絶望感のため、あるいは急激な米国からのアルコールや薬物の流入による影響などがあげられていたが、どの事由も決定的なものではなかった。そこで、筆者は現地での人的ネットワークをもとに、ある 17 歳の高校生 B のケースを入手することができた。この事例は、10 代男性の自殺の増加を示す決定的な要因を示すものとはいえないものの、若者が巻き込まれた、相反するジェンダー観を占める事例と言えるだろう。

B は高校 2 年生の男性で、どこにでもいるバスケットボールが好きな青年であった。B の家はマジュロ市の中心部にあり、国家省庁の役人を父親に持ち、父親の兄弟などの拡大家族と一緒に住んでいた。彼の家系はマーシャル諸島西部ラリック列島を広く統治するイロージー族の家系にあり、親族の中には同環礁やラリック列島最大の環礁クワジェリン環礁の地方政府の議員もいた。B は

日ごろから両親や叔父母から自分たちの一族が名門であることを伝えられており、親族に恥じる行為をしてはいけないと言いつけられていた。

彼は同学年の女の子 **K** のことを気にするようになった。**K** は長い黒髪が似合う大人しい女子生徒であった。彼女はいつも赤いパンダナスの実でできた赤い花の髪飾りをつけたと言われている。**K** はマジュロに住んでいたが、**K** 自身はマーシャル諸島東部のラタック列島北部出身で、小学校を卒業して高校に進学するためマジュロに出てきた。マジュロでは、叔父の家に住んでいるが、その叔父は地元に戻れば有力なアラップではあったものの、マジュロにおいては、国家官僚の一人に過ぎなかった。とりわけ、**K** の叔母にあたる叔父の妻の一族は、**B** の一族に従うべきリジャルバルの一族であり、その意味では **K** の一族は、**B** の一族に優越する意識を持っていた。

B は高校 2 年生で初めて **K** と同じクラスになり、**K** と仲良くなりたいと考えようになった。ただし、**K** とは出身地も全く違うため、話をするきっかけがなかった。家族に話をしたところ、**K** の一族の話で話題になり、**K** の一族は政治的にも異なる立場にあることから、付き合うことは認められなかった。こうして **B** は **K** と付き合うきっかけがないまま数カ月が過ぎた。

しかし、表面上は **K** に告白することを控えていた **B** であったが、**K** に対する気持ちは日に日に高まっていった。やりきれない **K** への思いに悩んだ **B** は、家族ではなく高校の教師に相談した。その教師は米国からのボランティアとして米国の大学が設立した NGO と契約しマーシャル諸島に派遣され、派遣先の高校生に 1 年間英語を教えることになっていた。この NGO から派遣されたどのボランティア教師も、大学を出たての 20 代前半の若者がほとんどで、教員経験を持っている者はほとんどいなかった。**B** が相談した教師もそうした若者の一人であったが、同教師は大学時代バスケットボールの選手であったため、バスケットボールを通じて学生たちとコミュニケーションを取るなど、高校生たちに非常に人気のある教師だった。

B は教師に **K** に対する思いを話すと、その教師は迷わず即答したとのことで

ある。「人生は一度きりしかない。米国ならば男が女にプロポーズするのは当然のこと。男らしく自分の思いを伝えるべきだ。」尊敬する教師からの後押しもあり、**B** は **K** にプロポーズをすることにした。

B は街中の映画館の近くに **K** を呼び出し、付き会ってほしいと話しかけた。何も知らない **K** は突然の告白に驚くと同時に家に逃げ帰ってしまった。

しかし、これがその後の悲劇を呼ぶことになってしまった。翌日、**B** は父親に呼びだされて、普段はめったに行くことのない親族のリーダーである大叔父の家に連れて行かれた。そこには叔父や親族が皆集まっており、物々しい雰囲気だったという。**B** は大叔父から **K** に告白をしたことを問いただされた。**B** は正直に認めると、周囲の親族から罵声を浴びせられた。それは、**B** の所属する一族と **K** の所属する一族が政治的に相反するグループであったということもあったが、むしろ大多数を占めた意見は、こともあろうに男が女にプロポーズをし、しかも断られるという恥ずべき行為を被ったということであった。とりわけ、問題視されたのは、優越されるべきである **K** の一族の構成員から、自分たちの構成員が恥ずべき行為を被ったということである。

B は **K** にプロポーズしたことは、周りで隠れて見ていた同級生などを通じて、その日のうちに周囲の人々の間で広まっていた。とりわけ、マーシャル諸島の社会では、「ブエブエナート」と呼ばれる井戸端会議などを通じて、こうした市井の噂話はすぐに広まってしまう。こうしたブエブエナートでは、必ず話題に出てくる人物たちの親族系譜が確認されるため、**B** と **K** の話はそのままそれぞれの家族の問題に昇華される。とりわけ年配者の世代では、プロポーズをするという行為も憚れることはもちろん、男が女に断られる、しかも、階層上では、上位とされる一族に帰属する男性が、下位とされる一族に帰属する女性にプロポーズを断られたという行為自体が、親族間のメンツを大事にするマーシャル諸島の社会においては決して許される行為ではなかった。その結果、「**B** が **K** にプロポーズを断られた」という欧米社会からすると日常のありきたりに見える行為は、マーシャル諸島の社会においては、ジェンダー観と関連しあい

ながら、一族同士のメンツをめぐる問題へとつながっていったのである。

B の行為は、それを監督できなかった両親や兄弟に対する非難につながり、一定期間彼らは周囲の人々から孤立させられることとなった。ところが、この周囲から孤立させられる期間は突然終了した。それは、周囲からの非難の声に耐えられなくなり、酒を飲んで首をつった B の自殺によってであった。

5. 考察～「グローバル・スタンダード」と「伝統」の混乱の中で

以上の二つの事例は、決してマーシャル諸島の一般的な事例を示すものではないのかもしれない。キリ島の小学生は、親元を逃げ出して米国で自分の生き方を見出すことができたのであろうと思われるが、多くの場合同じような環境に置かれると、父親をはじめとした周囲からの「しつけ」に従う形で、自分の意図に反して「男らしさ」というものを演じさせられて、自己矛盾の気持ちを抱えながら生きているケースも多々見られる。また、マジュロの自殺した青年の場合は、最悪の形となってしまったが、多くの場合は一時的な親族や家族内の不和が起き、家族や親族からつまはじきにされたとしても、一定期間の後、親族内での笑い話などの形で引き継がれていることはあっても、元の状況に戻る場合がほとんどである。ここで述べた事例を持って、マーシャル諸島全体の特殊な事情を述べるわけではないことは指摘しておかねばならないだろう。

ただし、これらの事例から読み解けることとして、マーシャル諸島の若者をめぐるジェンダー観が、伝統的な価値観と急速に浸透している米国からの価値観とのはざまで揺れ動き、結果として苦しみにつながってしまっていたという事実である。

J の事例の場合、伝統的なマーシャル諸島の社会の価値観の中では、J のような若者に対しては社会として受け入れられており、またイロージの世話をするという社会における役割も与えられてきた。しかしながら、急速に浸透する米国からの影響とも言える、「男性らしさ」という価値観の流入により、それをともに教育として受けた J の父親のような人々により、旧来のジェンダー

観は「悪しき因習」と看做されてしまい、米国のジェンダー観こそを絶対的な価値観として、子供たちの世代に押しつけられてしまうのである。

さらに、B の事例の場合は、さらに深刻である。この事例を素直に考えると、確かに B が K にプロポーズするという行為は旧来のマーシャル諸島の婚姻観にはほぼあり得ない行為であったのかもしれない。マーシャル諸島の場合は、同世代の男女は周囲からお膳立てをするかのごとく、自然にカップルへと導かれていく。そこではプロポーズなどをするという明確な意思是提示されなかったのである。ところが、B は米国人ボランティア教師による当たり前の価値観である「男が女にプロポーズする」に基づいて、K に告白したのである。この行為に対して、結果として K が断ることで、親族同士の問題という裏にある問題が噴出してしまったのである。

ここで、筆者は「B が K にプロポーズする」という行為を明確に否定するつもりはない。ただ筆者が問題視しているのは、こうした伝統的な社会背景や価値観があることに無自覚なまま、自己の価値観を「グローバル・スタンダード」な価値観として押し付けた格好になる米国人ボランティアの行為である。もちろんこの教師がこうした悲劇をもたらすことを予測して、B にアドバイスしたとは決して思わない。ただし、マーシャル諸島という社会で生活し、現地の子供たちの教育を行うという立場につくものならば、こうした社会背景を理解することは当然の行為である。この教師が発言した「男らしく」という言葉には、無自覚ではあろうが、英語が十分にできない太平洋島嶼国の子供たちに対して、自分たちの価値観を教えてやろうという、半ば進化主義的価値観のような姿勢があったのではないだろうか。こうした無自覚の行為の犠牲者の一人が B であったのではないかと思われる。

6. まとめにかえて

本稿では、マーシャル諸島における自分のジェンダー・アイデンティティや恋愛観に揺れた若者の事例を提示しながら、その背景にある伝統的価値観と米

国をはじめとした外部から流入してきた価値観の関係について叙述してきた。

同国は、ミクロネシアの一島嶼国であり、伝統的社会の影響を色濃く残してきた。特にそれぞれの出身の土地と結び付いた親族関係という枠組みは社会の中で強固に受け継がれており、その社会の価値観の下で構成員はそれを共有し、守っていくことが求められていた。マーシャル社会の場合は、母親から娘へと受け継がれていく母系出自にもとづく親族関係が重視される一方、その庇護者となる家長たる男性に対する一族の寵愛の深さは極めて強かった。そして、一族の構成員はその家長の命令は絶対である一方、一族に汚名を着せるような行為は禁止されていた。

一方で、20世紀以降、ドイツ、日本、米国などの施政下に置かれながら、それぞれの社会の影響を受けてきた。とりわけ、戦後、ピースコーを中心としたボランティアやラジオや新聞、テレビなどのメディアを通じた米国からの影響は極めて大きく、現在のマーシャル社会の中核にある人々の中にも、自然とその価値観が入り込んでしまっている。また、そうした米国からの価値観が流入される場合に、「伝統的社会の民主化」や「グローバル・スタンダード」という言葉と結び付き、あたかも人間として当たり前の価値観であるとして強制力すら働く場合がある。

このように、代々受け継がれてきたという伝統的な価値観という強制力と、「グローバル・スタンダード」という米国から流入された価値観という強制力のはざまで、自己のアイデンティティを確立できず、戸惑いの中で苦しんでいるのが、今日の多くのマーシャルの若者たちなのである。

本稿では、ジェンダー観に関わる問題の視点からマーシャル社会の現代の問題を検討してきたが、実際には、経済的な価値観や政治をめぐる対立など様々な問題が融合して、今日のマーシャル社会の問題が生じている。こうした問題を解決するための簡単な処方箋は残念ながらないであろうし、むしろそうした安易な処方箋こそが問題の本質を見えにくくさせることにつながると思われる。現在できることは、これまでの歴史を通じて積み重なり絡み合った問題の絡み

を一つ一つほどこしながら、その問題に影響を与えている時代背景や社会的要因を明示していくことではないだろうか。

(文献)

Adams, R. and D. Savran, (eds) 2002 *The Masculinity Studies Reader*. Oxford: Wiley-Blackwell.

Boyer, David 1967 “Micronesia: The Americanization of Eden.” *National Geographic*. 131 (5): pp.702-744.

Butler, J. 1990. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge. (『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳 1999. 青土社)

Connell, R. W. 2005 *Masculinities*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

DeBrum, O. and H. J. Rutz 1967 “Political succession and intra-group organization in Laura village”. In L. Mason (ed.), *The Laura Report*, Honolulu: University of Hawaii Press.

Dye, T. 1987 “Introduction.” In *Marshall Islands Archaeology*. Edited by Tom Dye. Pacific Anthropological Records Number 38. Honolulu: Department of Anthropology, Bernice Pauahi Bishop Museum. pp. 1-16.

Gardiner, J.K. (ed.) 2002 *Masculinity Studies and Feminist Theory: New Directions*. New York: Columbia University Press.

LaBriola, Monica 2006 *Ien Ippan Doon: Celebrating Survival in an ‘Atypical Marshallese Community’*. MA thesis, University of Hawai’i at Mānoa.

Pollock, N. J. 1974 “Landholding on Namu Atoll, Marshall Islands”. In *Land Tenure in Oceania* (ASAO monograph; No.2). Henry P. Lundsgaarde (eds.), The University Press of Hawaii. pp. 100-129.

_____. 1976 “The Origin of Clans on Namu”. In *Directions in Pacific*

Traditional Literature: Essays in Honor of Katharine Luomala. Ed. by Adrienne Kaeppler and H. Arlo Nimmo. Honolulu: Bishop Museum Press. pp. 83-100.

Riley, T. 1987 “Archaeological Survey and Testing, Majuro Atoll, Marshall Islands.” In *Marshall Islands Archaeology*. Ed by Tom Dye. Pacific Anthropological Records No. 38. Department of Anthropology, Bernice Pauahi Bishop Museum. Honolulu, Hawai‘i. pp. 169-270.

Tobin, J. A. 1952 Land Tenure in the Marshall Islands. *Atoll Research Bulletin*. No. 11, The Pacific Science Board, National Academy of Sciences-National Research Council.

Walsh, J. M. 1999. *Jowi ko in Majol: Contemporary Significance of the Marshallese Clan System*. Republic of the Marshall Islands’ Historic Preservation Office.

_____. 2003 *Imagining the Marshalls: Chiefs, Tradition, and the State on the Fringes of U.S. Empire*. PhD dissertation, University of Hawai‘i at Mānoa.

川原ゆかり 2006 「<文化>を問い直す—文化概念の再構築に向けて」 『アジア地域文化学の構築：21世紀 COE プログラム研究集成』 雄山閣。

_____. 2007 『少子化現象と男性アイデンティティー 日本文化の変容プロセス』 文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書。

黒崎岳大 2013 『マーシャル諸島の政治史 米軍基地・ビキニ環礁核実験・自由連合協定』（世界歴史叢書）明石書店。